

悪魔の $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ とイエスの $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$

—ヨハネ「福音書」9-10章における術語ラレイン [III-2a]—

川崎医療福祉大学 共通科目担当

佐々木 寛 治

(平成11年9月30日受理)

$\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ Teufels und $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ Jesu

—Die Terminologie $\lambda\alpha\lambda\epsilon\iota\nu$ in der Joh 9-10 [III-2a]—

Kanji SASAKI

*Beaufragte mit allgemeinbildenden Fächern,
Kawasaki Universität von Medizinischer Fürsorge,
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Received on September 30, 1999)*

概 要

わたしのものたち—わたし—父: これはヨハネ「福音書」10,14-15の中で語られる, この上もない喜びに満ちた推理連結である。この場でイエスは語られた。「わたしのものたち, わたしの羊たちはわたしの声を聞く」。他の場所ではイエスはこう言われた。「君たちはわたしのことばを聞くことができないからだ。君たちの父は悪魔だ」(8,43b-44a)。

われわれが幸いにして福音書にひとつの声, ひとつのことばを聞くことを得たとき, これは真にイエスの声, イエスの言葉だろうか。

Resümee

Die Meinen-Ich-Der Vater: Dies ist das fröhlichste Schluß in Joh 10,14-15. Da sprach Jesus: Die Meinen, meine Schaffe hören meine Stimme. Anderenorts sprach aber Jesus: Weil ihr mein Wort nicht hören könnt! Ihr habt den Teufel zum Vater (8,43b-44a).

Wenn wir auf der Bibel glücklich eine Stimme od. ein Wort hören können, ist dies denn wahrlich diejenige od. dasjenige Jesu?

1. その時の喜びやいかん

ヨハネ「福音書」の8,31-59は, その同位体の掴み取り方によっては、『アエネーイス』の象牙の門に酷似した位置づけが与えられうる。イエスとその共同体がいよいよこれから現実の主戦場に入っていく, その道行きの開始点という場面設定がそれである。この同位体の前半部分(V31-47)には, 来るべき決戦にそなえ「イエスに信じているつもりの方たち」に対して遂行される試練と教導, という物語が聞き取れる。試練と教導として読み取られる場合の, この同

位体の内部編成は極めて厳格な形式性をそなえていて、申命記が戒め・勧告を提示する方式に明確に則っている（同位体 Isotopie とはいエルムスレウ、グレマスなどによって形成されエーコが展開した、テキストの意味上のまとまりを表意する特別な概念である。ひとつのテキスト範囲がその切り口の違いくつもの同位体を重層的に包含しているものとして読まれうる事が重要である。拙論『重層』当該部分をぜひ参照されたい）。

1.1 イエスの戒め

1.1.1 申命記と戒め

申命記は古来からの「根本の戒め」を著者と読者の間に現在化して、これを「勧告 Parenäse」へと「翻案」する。それは「原則の提示」、「祝福の予告」、「呪いの予告」の三部で成り立っている。この方式を踏まえてヨハネ「福音書」は次のような骨格を提示している。

根本の戒め: 1,43 【従いなさい わたしに Ἀκολουθεῖ μοι.】 (弟子召命の最初の言葉)

その勧告 Parenäse

原則の提示 8,31 【もしあなたがたがわたしの言葉にとどまるならば、真にわたしの弟子である

Ἐὰν ὑμεῖς μείνητε ἐν τῷ λόγῳ τῷ ἐμῷ ἀληθῶς μαθηταὶ μου ἔστε.】

祝福の予告 8,32, 【そしてあなたがたは知る、真理を、そして真理は自由にする、あなたがたを

καὶ γνώσεσθε τὴν ἀλήθειαν, καὶ ἡ ἀλήθεια ἐλευθερώσει ὑμᾶς.】

呪いの予告 8,33-47 【わたしが真理を言うから、あなたがたはわたしを信じない【同じものが同じものをの原理】。わたしに聞かないでかえってわたしを罪とする、という罪、これが根本の罪である。あなたがたはこの罪の奴隷となる。あなたがたは聞か
ず、それは、あなたがたが神からではないからである (V44-47)】

「わたしにアコルーセオーセよ」との根本の戒めは、とイエスはいわれる、諸君の現実に即してこれを具体的言い換えるなら、「わたしの言葉にメノーし真にわたしの弟子となれ」ということである、と。するとさらにわれわれは問わざるを得ないだろう、<イエスの言葉にメノーしイエスの弟子となる>とはどういうことなのか、と。

1.1.2 イエスの弟子となったとき、とはどのようなときのことなのか。

イエスが「自分のものたち」について語られている驚くべき箇所が10章にある。

AA

- | | |
|----|--|
| 1. | 10:14 わたしは良い羊飼である。 |
| 2. | そして <u>わたしは知っている</u> , わたしのものたちを |
| 3. | そして <u>知っている</u> , <u>わたしを</u> , わたしのものたちは。 |
| 4. | 10:15 次と同じ様に, <u>知っておられる</u> , <u>わたしを</u> 父が, |
| 5. | そして <u>わたしも知っている</u> , 父を。 |
| 6. | そしてわたしのいのちを, わたしは捨てる |
| 7. | 羊たちのために。 |

- | | |
|-------|------------------------------------|
| 10.14 | Ἐγώ εἰμι ὁ ποιμὴν ὁ καλὸς |
| | καὶ <u>γινώσκω</u> τὰ ἐμὰ |
| | καὶ <u>γινώσκουσίν με</u> τὰ ἐμὰ, |
| 10.15 | καθὼς <u>γινώσκει με</u> ὁ πατήρ |
| | καὶ γὰρ <u>γινώσκω</u> τὸν πατέρα, |
| | καὶ <u>τὴν ψυχὴν μου τίθημι</u> |
| | ὑπὲρ τῶν προβάτων |

各行の先頭に注意を向ければ、カ音の頭韻連鎖 AA2-6 があって、これが開始行 AA1 を終結行 AA7 に結びつけ、もってこの二行の意味を相互に増幅させている。しかも頭韻連鎖の中央 *καθώς* は両脇にそれぞれ二つの *καὶ* を従えて高貴である。AA2-5 の各行中段にはギノスコーが 4 行整列していて、その開始行と終結行は一人称単数形で梓づけられ、その間に三人称の複数形／単数形が挟まれている。

このように結束された 4 行の末尾に焦点を当てて見よう。ここには信じられない事態が構築されている。

『精神現象学』のヘーゲルなら目を剥いて「Schluß 推理連結！」と絶叫するにちがいない。上半分 2 行の行末は「わたしの者たち」の対格／主格で、下半分 2 行の行末は「父」の主格／対格で終わっている。イエスから見て、知る／知られるの二重の関係が上下に二つ重ねられているわけである。そして驚くべきことに、上 2 行の「わたしの者たち」と下 2 行の「父」は、「わたしの者たちは わたしを ギノスコーする」と「父は わたしを ギノスコーする」という、上下に重なる二つの対格「わたしを」で媒介されている。まことに強烈に判然と、「わたし」を媒辞とする推理連結が聳えている。イエスをギノスコーするということによって、そしてそのイエスの「わたしを (メー)」の内部で互いを覗き合うものとして、「わたしの者たち」と「父」とは互いに向き合っているのである。

荘厳で厳粛な神殿の構築美を心に喚起させる、「わたしの者たち」—「わたし」—「父」という推理連結の美しく雄渾な存在連鎖。上掲四角形の内部を眺め渡されたい。上の構築物全体 (AA1-5) を支える礎 (AA6-7) の位置に、イエスの高らかな声「テーン・ブシュケーン・ムー・ティセーミ」が鳴り渡っている。この事実を耳にし、目にした古来の人々は、身の震えをさえ覚えたに違いない。われわれは瘦せていく「知性」の身体性を急ぎ復活させることなしには、聖書の生命の核のところを取り逃がし続けるのではないだろうか。

ともあれわれわれが、AA の箇所でのイエスの言葉の上に読み取ったのはこういうことである。つまりある人が「イエスの弟子となったとき」とは、その人がイエスをギノスコーしイエスからギノスコーされることによって、上に示されたような阿吽の存在連鎖のうちに抱きかかえられるようになったときのことであり、ということである。

1.1.3 「イエスをギノスコーする」とはどういうことか。

つぎの言葉は「イエスをギノスコーする」こと具体相を示すものに違ひなからう。

BB

1. 10:26 しかし、あなたたちは <u>信じない</u> 。	10.26 ἀλλὰ ὑμεῖς <u>οὐ πιστεύετε</u> ,
2. というのも、あなたたちはわたしの羊に属さないからだ。	ὅτι οὐκ ἐστὲ ἐκ τῶν προβάτων τῶν ἐμῶν.
3. 10:27 わたしの羊たちは <u>わたしの声を聞き分ける</u> 。	10.27 τὰ πρόβατα τὰ ἐμὰ <u>ἐκ τῆς φωνῆς μου ἀκούουσιν</u> ,
4. そしてわたしは <u>知っている</u> 、彼らを、	καὶ γὰρ <u>γινώσκω</u> αὐτὰ
5. そして <u>彼らは従う</u> 、わたしに。	καὶ <u>ἀκολουθοῦσιν</u> μοι,
6. 10:28 <u>そしてわたしは与える、彼らに命を、永遠の</u> 。	10.28 <u>καὶ γὰρ δίδωμι αὐτοῖς ζωὴν αἰώνιον</u>
7. そして決して彼らは滅びない、永遠に、	καὶ οὐ μὴ ἀπόλωνται εἰς τὸν αἰῶνα
8. そしてだれも奪わないだろう、彼らを、	καὶ οὐχ ἀρπάσει τις αὐτὰ
9. わたしの手から。	ἐκ τῆς χειρὸς μου.
10. 10:29 わたしの父が、わたしに与えてくださったもの、	10.29 ὁ πατήρ μου ὃ δέδωκέν μοι
11. [それは] すべてのものより偉大である、	πάντων μείζον ἐστιν,
12. そしてだれも奪うことはできない、	καὶ οὐδεὶς δύναται ἀρπάξεν
13. 父の手から。	ἐκ τῆς χειρὸς τοῦ πατρὸς.
14. 10:30 <u>わたしと父は一体である。</u>	10.30 <u>ἐγὼ καὶ ὁ πατήρ ἐν ἐσμέν.</u>

もう一度確認しておこう。AA の中にわれわれは、イエスとイエスのものたちとの間では、ギノースコーシギノースコーされる作用線が、つまり認知言語学でいうメンタルコンタクトの方向線が、交互に投げかけられている様を感嘆しつつ聞き取ったのであった。

BB3-6の間の4行の上でもこの方向線は、まるで機を織るように几帳面に、一行一行順次交替している。イエスからの方向線はギノースコーであり、イエスからのこのギノースコーを挟んでイエスへ向けての方向線は二本ある。一方が「聞くアクーオー」であり、他方が「従うアコルーセオー」である。このことから全く明らかに、われわれは次のように理解することが出来る。イエスからのギノースコーに媒介された、この「アクーオー」と「アコルーセオー」との合体したものが、とりもなおさずイエスへ向けた「ギノースコー」の具体相である。

1.2 イエスの声を聞くということ

「アコルーセオー」に結合される「アクーオー」とは何なのか。それを BB の中に求めているこう。

1.2.1 「わたしの羊たちはわたしの声を聞き分ける、そしてわたしは知っている、彼らを」=「同じものが同じものを」の原理の躍動

何よりもまず、BB3-4の音読をくり返してみよう。ここにも不思議な力音頭韻連鎖が出現してこれによって舞台が設定されているが、その中に、二種の象徴音を聞き取ることが出来る。イエスは /τῆς φωνῆς μου/, /καὶ γὰρ γινώσκω/, /καὶ γὰρ διδωμι/, /ξῶν αἰώνιον/ の中に含まれた中位長母音 /ω (η)/ で象徴され、イエスに愛された羊たちは、/τὰ πρόβατα τὰ ἐμὰ/, /ἀντὰ/ の中で慈しみをまとして反復される低位短母音 /α/ で象徴されている (α と ω, 阿と呼)。V27 の中で母音の回転、/α/・/η/・/ω/・/ου/・/ω/・/α/ の流れの輪は同時に意義素《羊たち》から始まって《羊たち》で終結し、そのことが中央の《イエス》を profile する。/タ・プロバタ、タ・エマ/ の中の /わたし/ と /羊たち/, つまりは《イエス》と《羊たち》との間に響き合っているこの親和力は、メンタルコンタクトの方向線の交互性、羊たちがイエス (の声) を、そして逆にイエスが羊たちをという交互性によってその基盤をしっかりと確立されていたのである (/τὰ πρόβατα τὰ ἐμὰ/ の中でさえも、音素 /o/ が音素 /α/ たちに取り巻かれている)。

このように表現面で、統語論的にも音韻論的にも濃密に提示されているイエスとその羊たちの親和力に注目した上で、BB1-2と3-5とを比較してみよう。慄然としてわれわれの納得せざるを得ないことは、もしわたしが、イエスによってわたしの羊たちと呼ばれる者とされているのでなければ、わたしはイエスの声は聞くことは決してできはしないのである。イエスの声が聞こえる / 聞こえないの区別は生やさしいものではない。たとえばわたしが、自分の存在していることを当然のこととみて、その上で、わたしの数ある機能のうちのひとつ (聴覚) がその能力を発揮する / 発揮しないという次元での区別なのではない。上の区別はすでに存在全体の存否を問う次元のものである。いわば音叉=イエスの前に共鳴箱=わたしが立たたとしても、わたしの存在としてのその固有の振動数がイエスの振動数に合致していないのなら、残念ながらわたしには「風が吹いた」というくらいにしか感じ取れないのである (Vgl. 3,8)。イエスの羊とされ

た者たちとは、その存在がイエスと共振する者であるということであり、彼らにおいては、この共振・共鳴という原理によって、イエスの声とその内部に向かいまた外部に向かって鳴り響くのである。内部で響くとは、イエスの羊たちはその内部に「イエスの声を聞く」ということであり、外部へと向かってまた響くとすれば、彼らは「イエスの声を伝え伝えて外に出る」ということである。「聞くアクーオー」にしてすでに存在次元の活動であるなら、聞いて、その後に「実存的な決断」があり、こうして初めて「従う」という行動が開始する、ということは奇妙な手続きであることになる。「従うアクーオー」は「聞くアクーオー」の自動的な結果・現実作用・表現（表への存在次元での現れ）である。

テキストに戻ろう。BB3-5でイエスが「わたしの羊たちは」という三人称複数主語文を語り出されたとき、昔から人々はその語りの最後尾 BB5に埋め込まれた $\bar{\alpha}\kappa\omicron\lambda\omicron\upsilon\theta\omicron\upsilon\sigma\acute{\iota}\nu$ μοι の声の中に、それに先行する BB3の $\bar{\alpha}\kappa\omicron\upsilon\theta\omicron\upsilon\sigma\acute{\iota}\nu$ の中の音素たちが丸ごと流入しているのを、まさに自動的に聞き取ったはずである。ということはつまり、イエスの声に聞き入ることがとりもなおさずイエスの人格に包摂されることとなっている、それがすなわちイエスをギノースコーすることなのであると、彼らは理屈抜きに、自然に、感じ取ったはずである。そのことによって彼らは、イエスの羊たちとイエスとの間にその存在次元で交流する、感嘆すべき親和力に胸躍らせてきたはずである。

ソシュールのアナグラム研究が偉大なのは、民衆の中に脈打つこのような自然で自由で奥深い詩的心性に目を向け耳を傾け直すべきことを、——抽象化された現代人の学問がその身体性を回復して飛躍することを要請しつつ——教えている、という点にあらう。

1.2.2 イエスの声こそ、父なる神との存在の共振に発源する〈共鳴音〉だったのだ＝同じものが同じものをの原理の根源

民衆がイエスの語りの中に聞き取る、／タ・プロバタ、タ・エマ／の中の、イエスとその羊たちの間の絆は、単に推察され予想される「感じ」という曖昧なものではなく、むしろいわば幾何学的定義に由来する厳密、澄明にして確固な定理である。このことが BB6以下の昂揚していく語りの中で明らかにされていく。

BB6-9と BB10-13とが激情的に共振しあっていることは重大である。BB10の $\delta\ \delta\epsilon\delta\omega\kappa\acute{\epsilon}\nu\ \mu\omicron\iota$ は6,39のそれに他ならず、「イエスのものたち」とされた羊たちは、単にイエスの守護のうちにあるに留まるのではない。「断じて失いはしない」、「救い抜く」という父と子の結束・一体のうちに彼らは守られているのである。イエスの羊とされた者はイエスをギノースコーし、イエスの声をアクーオーする、というとき、彼らが知り聞くのは、父と子が共に、心を合わせてなされるこの共同性から発現する愛の深さなのであろう。

こうして語りの頂点でイエスは、わたしと父とは「一体である ヘン・エスメン」と語られる。それは説明言語ではなく遂行言語なのである。イエスはいまここで父の御心を遂行されているのであり (V25)、語りとしても「わたしが自分自身からは何もせず、わたしに父が教えられたとおりに、これらのことをわたしが語っている $\lambda\alpha\lambda\acute{\omega}$ 」(8,28 Vgl. 12,49)ということなのである。イエスは地上の羊たちが聞くことを得ない父なる神の声の、その〈共鳴箱〉そのものとして、羊たちの心にこれを植え付けておられるのである。イエスがヘン・エスメンと $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ されるとき、イエスにおいて父の御声が発していることが告知されたのであり、イエスの羊たちはイエスにおいて発している父の御声をイエスの人格の声として聞きうの

である。

BBの全範囲を繰り返しくり返し読んでみれば、一方で頂点 BB14から神的爱が奔流となって流出して、他方でイエスの声を頼りにしてイエスの羊たちが群となって、父子の親密な共同の内部へと吸い寄せられるように、この奔流を遡上しているように聞こえる。

1.3 イエスが名を呼んで、わたしに声をかけられるとき

ひとは「イエスの羊」とされたとき、たんにイエスの「声が聞こえる」というだけではない、ひとりひとりその名を呼んで声をかけて下さるのである。そのようにイエスは10章冒頭で語られる。

1.3.1 イエスとイエスの羊たちとの存在は、たんに共振・共鳴しあうだけでなく、我と汝の、名を呼びあう persönlich な関係にある (10,3の眼もくらむような声の呼応に注目せよ)。

CC

10:3 この者のために門番は開き、

そして 羊は 彼の声を 聞く。

そこで 自分の羊を 彼は声をかける、名によって

そして連れ出す、彼らを。

10:4 自分の羊をすべて連れ出したとき、

彼らの前を彼は行く。

そこで羊は彼に従う、

知っているからである、その声を。

10:5 ほかの者にはしかし、

決してついて行かず、

彼らから逃げ去る。

知らないからであるほかの者たちの声を。

10.3 τούτῳ ὁ θυρωρὸς ἀνοίγει,

καὶ τὰ πρόβατα τῆς φωνῆς αὐτοῦ ἀκούει

καὶ τὰ ἴδια πρόβατα φωνεῖ κατ' ὄνομα

καὶ ἐξάγει αὐτά.

10.4 ὅταν τὰ ἴδια πάντα ἐκβάλῃ,

ἐμπροσθεν αὐτῶν πορεύεται,

καὶ τὰ πρόβατα αὐτῷ ἀκολουθεῖ,

ὅτι οἶδασιν τὴν φωνὴν αὐτοῦ.

10.5 ἀλλοτρίῳ δὲ

οὐ μὴ ἀκολουθήσουσιν,

ἀλλὰ φεύξονται ἀπ' αὐτοῦ,

ὅτι οὐκ οἶδασιν τῶν ἀλλοτριῶν τὴν φωνήν

1.3.2 喜ばしい報知の傍らで、「わたしはだれの声を知っているのか」の間が湧き上がる。

上掲 CC に語り出された、心躍る喜ばしい報知の傍らで、われわれの脳裏に奥深い不安が鎌首をもたげる。CC 最終行が胸を刺す。

うえの出来事は、誰だろう、自分のものたちとイエスに呼ばれるに至ったひとたちのことである。そうでない者たちはどうなのか。

わたしにおいて、名を呼んで声をかけられるという出来事が仮に生じたとして、

その声の主がイエスその方である保証はどこにあるのか。

逆にいまここで、イエスがわたしの名を呼びに呼ばれているのに

わたしはそれが聞き取れていないとしたらどうなのか

イエスは「イエスに信じているつもりの方たち」の自己確信を根底から叩きつぶすことをされるし、イエスの声が聞けないのは悪魔の声を聞いているからだといわれたりもする(後述)。その呪いの予告は小論 2 頁に掲げてある。喜びの報知を聞いた今、むしろこの呪いの言葉が**他人事ではあり得ないものとして響き始める**。他方「ユダヤ人たち」はイエスの声の中に**悪霊を聞き取ったのだった** (7,20:8,52:10,20)

2. 「われらが父」の声

「天にましますわれらが父よ」と呼び唱え、その父から聞いているつもり (8,38) の者たちにイエスは、「そうだ、まさにそれは君たちの父だ、わたしの父とは関係ない」と言われる。

2.1 わたしが「自分自身から」の確信を上へ上へと求めて行っても、イエスは次から次へと執拗にその確信を叩きつぶされる。

DD [知性レベルで知解できるか否かではなく, 身体・存在レベルで「聞く振動数を持たない」⇒「悟らない」
⇒「イエスを殺そうとする」の関係が強調されている。]

<p>[1] 8:33彼らは答えた, 彼に向かって。 「子孫, アブラハムの, わたしたちは [それで] ある。 そして誰の奴隷になったことも ありません, 未だかつて。 どうしてあなたは言われるのですか, 『自由に, あなたたちはなる』と。」</p> <p>[2] 8:34お答えになった, 彼らにイエスは。 「アメン, アメン, わたしは言う, あなたたちに。 犯す者はだれでも, 罪を, 奴隷である, 罪の。 8:35そして奴隷は留まりはしない, 家に, いつまでも, 子は留まる, いつまでも。 8:36もし, だから, 子があなたたちを 自由にすれば, 本当に自由に, あなたたちはなることだろう。</p> <p>[3] 8:37わたしは分かっている, 子孫, アブラハムの, あなたたちが [それで] あることは。</p> <p>[4] だが, あなたたちは 求めている。わたしを殺すことを。</p> <p>[5] わたしの言葉 <u>ο λόγος ο εμός</u>が, 場所を持たないから, あなたたちのなかに。 8:38わたしが見たことを, 父のもとで, わたしは語っている <u>λαλῶ</u>。</p> <p>[6] ところが, あなたたちは聞いたことを, 父から, <u>α ἡκούσατε παρὰ τοῦ πατρὸς</u> 行っている。」</p>	<p>8:39彼らは答えた, そして言った, 彼に 「父, わたしたちの, [それは] アブラハムです」 言われる, 彼らに, イエスは。 「もし子ら, アブラハムの, あなたたちが [それで] あるなら, 業を, アブラハムの, [それを] あなたたちはするはずだ。 8:40今, しかし, あなたたちは 求めている。わたしを殺すことを 人間を, 真理をあなたたちに語った, 神から聞いたところの。 <u>ὁ τὴν ἀλήθειαν ἠγὼν λέλαλῆκα</u> <u>ἣν ἤκουσα παρὰ τοῦ τοῦ θεοῦ</u> そんなことは, アブラハムはしなかった。 8:41あなたたちは 行っている, 業を, 父の, あなたたちの。」</p>	<p>彼らは言った, そこで, 彼に, 「わたしたちは森羅によって 生まれたものではありません。 ただひとりの父, わたしたちは [その方を] 持っている, 神を。」 8:42言われた, 彼らに, イエスは。 「もし神があなたたちの父であれば, あなたたちは疑するはずである, わたしを。 わたしは, じつに, 神のもとから出て, ここにいるからだ。 さらにまた, じつに, わたしは 自分自身から来たのではなく, 神がわたしをお遣わしになった からである。 8:43なぜわたしの語っていること^を, あなたたちは悟らないのか。 43 διὰ τί <u>τὴν λαλίαν</u> <u>τὴν ἐμήν</u> <u>οὐ μινώσκετε</u>; なぜなら, あなたがたはできないからだ 聞くことが, わたしの言葉を。 <u>ὅτι οὐ δύνασθε</u> <u>ἀκούειν τὸν λόγον τὸν ἐμόν</u>。 8:44あなたたちは, 父から, つまり悪魔から, である, そして欲望を, 父の, あなたの方の, 願っている 満たすことを</p>
--	---	--

各段階は次の6個のステップを踏んでいる。 自己確信 [1]: イエスの言葉導入部 [2]: 勧め [3]:

罪とする事実指摘 [4]: 罪の核心点開示 [5]: 父祖物語 [6]:

ステップ [4] : [3] の勧めに反し君たちはわたしを殺そうとしている、という事実の指摘（何を思っているか考えているかが問題ではなく、身体的存在レベルでの行動が問題である）。ステップ [5] : 君たちの心の中にわたしの言葉が根付く場所がもたらさないということが罪の核心である（聴覚、注意力、知解力の問題ではなく、存在レベルの問題である）。君たちはわたしの言葉に聞き従うエネルゲイア、それを持つ者たちが棲息する存在圏、そこから見放されている。わたしの言葉とは父からの、つまり神からの、真理をラレオーするものである。以上、[4-5] を通じて、イエスの言葉はいわば神の言葉の〈共鳴音〉であることが、術語 $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ を使用することによって極めて鮮明に告げられている。それに踏まえ、イエスが言われる わたしの言葉 $\delta\lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma\ \delta\ \epsilon\mu\acute{o}\varsigma$ はここでは、イエスの言葉のラレオー性、つまり言葉に内属する論理・道理というよりも、むしろ言葉の音声としての響き（表現面）、あるいは音声において外化され感性化された人格性メシア性の露呈伝播、そういう身体的性格の方を強調して使用されている。それはこの言葉を受信する者の、（知性の如何ではなく）存在の如何を、照射するのであり、そしてそこへと集中して作用する。知解しうるか否かは、（感覚ではなく）感性レベルで、つまり身体的存在レベルで聞き取りうるか否かである。神の言葉の〈共鳴音〉を聞くことを得るという存在性（この〈共鳴音〉に共鳴しうる振動数）に恵まれているか否かが問題であるということ。このメッセージが単に語られているということだけでも著しいことである。しかしこれが、上のように周到で壮大な戦略的構築美の中で、反復し集中して展開されていることは、語られているこの事態の、測りがたい重大性を告げるものである。ステップ [6] : 君たちに如上の罪があるという逃れ得ない現実の、その根拠は君たちの父＝君たちが守り抜くその自我＝「自分自身から」にある。「君たちの存在そのものが問題である」ということの帰着するところはこうして、「君たちの父そのものが問題である」ということとなっている。

2.2 「あなたたちは悪魔の $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ を聞いているのだ」とイエスは言われる。この「あなたたち」の内部にわたしがいるのではないのか。

EE

8:44 あなたたちは、父から、つまり悪魔から、である、

そしてあなたの方の父の欲望を満たすことを願っている。

悪魔は初めから人殺しであった、そして彼は真理のうちに立っていない。

というのも、ないからだ、真理が、彼のうちには。

悪魔が語るときは、彼は偽りを彼固有のものに根ざして語る。

$\delta\tau\alpha\nu\ \lambda\alpha\lambda\eta\gamma\acute{\epsilon}\omega\ \tau\acute{o}\ \psi\epsilon\upsilon\delta\omicron\varsigma\ \epsilon\kappa\ \tau\acute{\omega}\nu\ \iota\delta\iota\omega\nu\ \lambda\alpha\lambda\epsilon\iota\tau\epsilon$

というのも偽り者で彼はあり、偽り者を生む父で [あるから]。

8:45 わたしがしかし、真理を言う $\alpha\lambda\eta\theta\epsilon\iota\alpha\nu\ \lambda\acute{\epsilon}\gamma\omega$ から、わたしをあなたたちは信じない。

8:46 あなたたちのうち、いったいだれが証明できるのか、わたしに、罪について。

もし真理をわたしが言う $\alpha\lambda\eta\theta\epsilon\iota\alpha\nu\ \lambda\acute{\epsilon}\gamma\omega$ なら、なぜあなた方は信じないのか、わたしを。

8:47 神からである者は、神の言葉を聞く。何故にあなたたちは聞かないのか。

$47\ \delta\ \omega\nu\ \epsilon\kappa\ \tau\omicron\upsilon\ \theta\epsilon\omicron\upsilon\ \tau\acute{\alpha}\ \rho\acute{\eta}\mu\alpha\tau\alpha\ \tau\omicron\upsilon\ \theta\epsilon\omicron\upsilon\ \acute{\alpha}\kappa\omicron\upsilon\epsilon\iota\ \delta\iota\alpha\ \tau\omicron\upsilon\tau\omicron\ \eta\mu\epsilon\iota\varsigma\ \omicron\upsilon\kappa\ \acute{\alpha}\kappa\omicron\upsilon\epsilon\tau\epsilon$,

なぜなら神からでは、あなたたちがいないからである。」

術語 $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ は DD においては、「イエスにおける神の言葉の〈共鳴音〉としての語り」という性格が顕著であったが、ここ EE では「悪魔の語り」という性格が与えられていることが重大である。

それとの対比でイエスの語りは、ここ EE では、「真理をレゴースする」と述語される。くり返すが「悪魔のラレオー」との対比から離れた DD の 8,40 ではイエスは「真理をラレオーする」とされているのである。イエスの言葉が DD で「ホ・ロゴス・ホ・エモス」と提示されるとき、真理を語る、そのレゴースとラレオーとの二重性がそのまま表現されていた。

「悪魔のラレオー」とは、われわれが何度も指摘してきた如く、【悪霊の語りはラレオーで表示されるものだ】という語り手聞き手に共通なフレームとベルゼブル論争とが踏まえられたカテゴリーである。イエスの言葉を「悪霊のラレオー」と聞く振動数を持つ者たちは、「悪魔のラレオー」を自分の耳に正しい言葉として受信し、神奉仕であると確信しつつ、イエスに信従する者たちを殺害する（そのように聞き行動する危険をいつもわたしは孕んでいるのだと、思い知らされる）。

10章の、「わたしのものたち」—「わたし」—「父」の推理連結という存在上の一体性・親和性が浮かび上がっているところでは、「イエスの声」と「聞こえる」とが語られはするが「イエスのラレオー」は出現しない（このテキストは「信ずる者をフォーネオーすることによって連れ出す」という方向線を突き出すことによってレゴースをラレオーにむけて革新し、既成知識化した信仰の内容を存在次元から揺り動かし転倒することを目指す。しかもそのことが同時に、「光の残余を連れ出す」とするグノーシスへの対決[あるいはその飛躍的包摂。『39資料』8頁後半の「声」を「光」に置き換えて熟視されたい]ともなることが志向されているとみることができる）。このことを念頭に置いてみると、8章末で「イエスのラレオー」と「悪魔のラレオー」が上のように交錯していることの意味は重大である。つまり8章の「イエスのラレオー」は、「イエスならざる者のラレオー」の海の中で、それらと対比されるものとして提示される、ということであり、その際は【何がイエスの言葉か分からないで互いに深刻に対立する修羅場で格闘する読者達】が想定されている、ということである。

垂直軸に「神のラレオー」と「悪霊のラレオー」が貫いていて、これを根幹にして日常世界での水平軸に「イエスのラレオー」と「悪魔のラレオー」の対立が広がっている——このような構造のもとで読者を物語過程に巻き込もうとするテキスト戦略のなかで、読者は過酷な試練を潜らされるのである。

わたしは誰のラレオーを聞いているのか、どこにいるのか、わたしはどうしたらよいのか。

3. イエスが提示される $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ の系譜

恐怖政治の物語世界＝「神の法廷」顕現物語 7章～10章内部に登場する術語 $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ の諸系列を鮮明に概観することが出来る。

3.1 「イエスのラレオー」の中身はイエスが上げられるときに知られる、とされている。

FF

8:21そこで、イエスはまた言われた *εἶπεν*。「わたしは去って行く。あなたたちはわたしを捜すだろう。だが、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。わたしの行く所に、あなたたちは来ることができない。」8:24だから、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになると、わたしは言った *εἶπεν* のである。『わたしはある』ということを信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」

8:28そこで、イエスは言われた *εἶπεν*。「あなたたちは、人の子を上げたときに初めて、

『わたしはある *ἐγώ εἰμι*』ということ、また、わたしが、自分勝手には何もせず、ただ、父に教えられたとおり

にこれらのことを語っている *ἀλλὰ καθὼς ἐδίδαξέν με ὁ πατήρ πάντα λαλῶ*」ことが分かるだろう。

人の子は上げられ「なければならない」が、そのアナバシスにおいてはじめてイエスの言葉の淵源が分かるとされている。しかし同時に、人の子のアナバシスにおいてひとは人の子を見失い、自らの罪のうちに死ぬことになるとも言われている。つまり、人の子のアナバシスの暗闇、そしてその中で自らの死を潜ら「ざるをえない」という暗闇。この二重の闇の中でわたしたちがなす術を全て失ってただひたすら祈りつつ捜し求めるとき、そのときそこへと向こう側から『わたしがある』が訪れられ、そして人の子の言葉の内実が新しい輝きを発して父の教えとして到来する、と語られている（父からの教え・言葉・声としてのイエスの語りは必ず術語 *λαλέω* で提示されている）。ところで上の、「わたしはある」と「教えの到来」とはヨハネ神学においてひとつのこのようにみえる。

人の子が上げられたときにわかることとして8,28に記されていること、これはイエスがサマリア女に語られた

わたしはある。君に話している者だ *Ἐγώ εἰμι ὁ λαλῶν σοι 4.26*

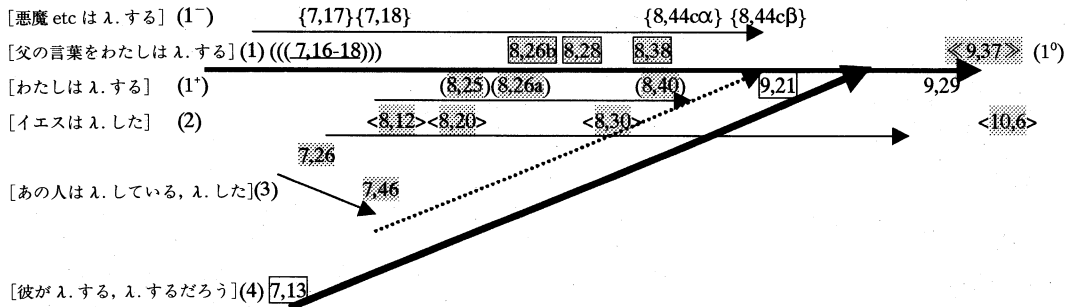
の展開・解釈に違いないであろう。ヨハネ神学は、『在りて在る』神がイエスにおいて、『君に語りつつある』として到来されたというのである（エレミヤス『新約聖書の中心的使信』川村訳、新教出版社187以下参照）。君に〈声を掛ける〉——いまここでのこの *persönlich* な愛のはたらきの存在論（われわれは拙論『エイドー』にて11章で、同『聞く』にて10章で、声をかけて下さるイエスの声に出逢えたこと、あるいはそのように思えたことを、限りない恵みと感謝している）——ヨハネ神学はこれをこそその核としているのだといえよう。

3.2 「神の法廷」顕現物語7-10章内部のラレオーを総覧してみよう

さて、上掲 FF8,28のなかでくそこでイエスは言われた *εἶπον* 「わたしは……と語る *λαλῶ*」という単位を取り上げてみよう。元来、ラレオーするという語感「異様な音声を発する」というニュアンスを抱え込んでいて、（「わたしは……とレゴース」とは言っても）「わたしは……とラレオーする」と言うのは尋常ではないのである。ともあれここでは〈ラレオーする〉の主語、つまりラレオーの「発話主体」はイエスである。そして「イエスが……とラレオーする」という発話行為を提示しているのはイエス自身である。こうして8,28のラレオーは「提示者イエス、発話主体イエスのラレオー」とまとめられる。このようにして7-10章に出現するラレオー発言のすべてを、提示者と発話主体という観点で系統別に整理してみれば、つぎのようにまとめることができる。

この図に若干のコメントを加えておきたい。

7章~10章 $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ 配置図 (網掛け部 イエスの発する $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$, 点線部: 象徴次元のイエスの十字架上の言葉, 証言者の上昇に伴伴)



提示者: イエス

発話主体: 自分から語る者ないし悪魔

[悪魔 etc は λ. する] 「イエスが提示する, 自分から語る者ないし悪魔の発する $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ 」 系列(1-)

発話主体: イエス

[父の言葉をわたしは λ. する] 「父からの言葉をイエスが自ら発し自ら提示する $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ 」 系列(1)

[あなたに λ. している者] 臨在の $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ 系列(1')

[わたしは λ. する] 自余の「イエスが自ら発し自ら提示する現在時制の $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ 」 系列(1+)

提示者: 語り手, 発話主体: イエス

[イエスは λ. した] 「語り手が提示する, イエスの発する $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ 」 系列(2)

提示者: イエスを証する者, 発話主体: イエス

[あの人は λ. している, λ. した] 「イエスを証する者が提示する, イエスの発する $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ 」 系列(3)

提示者: ***, 発話主体: イエスを証する者

[彼が λ. する, λ. するだろう] 「イエスを証する者が自ら発する $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ 」 系列(4)

以上7系列の方向線は鮮明である。なおわれわれの恐怖政治の物語世界=「神の法廷」顕現物語(7章~10章)内部には上の系列以外に, 9,29の「ユダヤ人たちが提示する, 神の発する $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ 」が出現する。またこの範囲にはひとつだけ現在完了時制の「総括の $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ 」8,40が存在しているがこれは系列(1+)に算入しておく。

すべての方向線の決定的な開始点は((7,16-18))の二重性である。

9,21から完成の歩みを始める系列(4)「イエスを証する者が自ら発する $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ 」は,

A: マルコではイエスの家族がイエスを連れ戻しにくることとベルゼブル論が重なり家族・ベルゼブル・汚れた霊・ $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ というフレームが存在し, 他方マタイではイエスを連れ戻しにきた家族の語りが $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ で提示されているという共観福音書からのフレームが読者の記憶の中にあり, それがヨハネ「福音書」9章の両親の査問, 両親による $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ の提示が家族問題としての信仰問題に関連すること

B: テキスト上後続する「神の $\lambda\alpha\lambda\epsilon\omega$ 」9,29との関連,

C: 弟子論であることの強調9,27-29が証言問題を提示していること,

D：ならびにマタイ10,19-20（平行）における証言者の $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ と父の霊の $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ との対応関係,

E：従ってまた〈証言者と神〉の組と〈証言者と父の霊〉の組との対応関係,

F：および使徒言行録のステファノ説教とそのなかの $\lambda\alpha\lambda\acute{\omega}\nu$ の拡大解釈とその結果の吸収,

以上の諸項との反照関係の下で展開されていき、系列(1⁰) 「臨在の $\lambda\alpha\lambda\omega$ 」と合一する [バラクレートスの次元]。

系列(1)の概念がわれわれの研究における動詞 $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ の「超スキーマ」である。

イエスは自らの語りは 父の教えられたまま を この世に向けて語る のであると語られるが、このときの、〈父からの言葉を、イエス自ら発しておられるのだと、イエス自らが提示される語りにおける $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ 〉が系列(1)である。これは必ず一人称・単数・現在の $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ が使用される。ルカの $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ は一般に憑依言語であり、使徒言行録の異言における $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ はその面が顕著であるが、それと極めて対照的に、系列(1)の $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ は反省的自覚的である。そのことの根拠は、この言語が何かの〈内容〉を〈表現〉しているのではなく、〈父の意志〉を〈遂行〉していることによる。例えば王が「余は宣言する」と語ったり、船舶命名式で「わたしは氷川丸と名付ける」と当事者が語れば、その言葉が発せられたその場で行為が遂行されたのである。系列(1)の言語でイエスが、「わたしは父の教えをこの世に向かって $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ する」と語られ、この言葉の振動に——その存在の同型性の故に——自ら共振する（つまり聞き取る）者があれば、このとき、父なる神の御言葉が地上に根を張ったのである。

この書物の中で極めて意識的に配置された術語 $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ は、「著者」側の意図に統御されていてすべてがいわば家族的類似性のうちに関連づけられている。それらは上の「超スキーマ」の、ヨハネ一流の具体化である

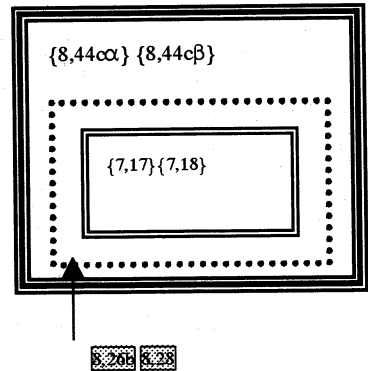
さらに不気味に奥深い考察を要求している事態は、テキスト後方では、イエスの「総括の $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ 」、ならびに「法廷の $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ 」と系列(2)とが交錯するばかりか相互に重なり合う相が存在するという点である。この側面の解析には分析手段の格段の精密化が不可欠である。

上掲図表で最も奥深い真実みを感じさせること＝イエスの遂行言語 $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ と悪魔の $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ が並べられてあること
——それは「二元論」だろうか

イエスの遂行言語である系列(1) $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ は図表に明らかなごとく、そして2.2でも確認したごとく、悪魔の $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ 系列(1⁻)と平行して叙述されている。垂直軸に立つ神の $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ 、そして悪霊の $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ 、この両者は伝統的に語られてきたものである。ヨハネ「福音書」は神の言葉が預言者を介して民に伝達されるのではなく、神の声がイエスにおいて民衆に直接聞き取られうるのである、というテーマを大胆に打ち広げる。民に直接する神の声、この途方もなく歓喜に満ちた「神の人間化」は、逆に人間の試練の極限化を伴わざるをえないはずである。神の言葉を民に伝える立場に立つ預言者にあつて、偽預言者の蒙る呪いと罰は、神の声をイエスにおいて直接に聞くとされた民の、その聞き違いが招来する呪いと罰に比べれば迂遠なものにすぎないであろう。

水平軸で主観的には人の子イエスの $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ を（そのようにして神の声を）聞いているつもりであるが、客観的には自分の父の欲望、つまり自分の自我の $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ に聞き入っている——こういう人間の拭い難い「自分自身

から」の根本的な罪が炙り出し続けられ、試練の煉獄は過酷さを増すしかないだろう。それが「名を呼んで声をかけて頂けるイエスの羊たち」の爆発する歓喜の裏側である。イエスからの $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ が固定された瞬間、それは悪魔からの $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ に転換するのだろうし、悪魔からの $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ としか考えられない声がイエスからの $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ であるかも知れないのである。信じているつもりの者を鼓舞して幻想を抱かせ、この者を〈自分から〉の世界へ帰還させそこへとこの者を幽閉する当体を、ヨハネのテキストは「悪魔」と呼んでいる。



われわれは12ページの図表を得た時点で、われわれの $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ 探求の途中経過が非常にコンパクトに提示できてしばらくは喜んだが、現在はむしろその重大な危険性を憂慮している。この図表によっては、〈このわたし〉に向けられたイエスの（試練の）言葉を、まさに「横から他人事のように客観的に眺めている」ことを当然視する考察態度が助長されるからである（物語論の著者・言述世界・物語世界・読者、これら諸要素の関係の図示についても同様な危険性が伏在する）。上図はその危険性から逃れるためのひとつの工夫である。われわれはイエスを信じているつもりでも常に「わが父の声」{8,44αα} {8,44cβ} が手前にある。奥の向こうに耳を傾けても得られるのは {7,17} {7,18} つまり〈自分からの〉声であるが、ときおりかすかに8,26b 8,28に接しうることがある——それは(((7,16-18)))の二重性によることである——というのが、われわれの実状なのであろう。

(((7,16-18)))の二重性

「イエスの $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ はイエスの父なる神の教えと業の、イエスにおける到来である」という定式 (8,26b. 8,28. 8,38: 12,50bα. 12,50bβ) をまず確認しておこう。ここに二重性というのは次の意味のものである。つまり一方で7,18の $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ は「自分自身からの語り」として全く否定的であり——ヨハネ神学では「自分自身から」は「神から」でない以上は「悪魔から」である以外になく、しかも悪魔の語りは $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ で表示されている8,44α. 8,44cβ——、他方で7,17の $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ は含意された節否定の否定性が $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ に向けられているととれ（このときは $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ は7,18の $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ と同質）、また $\acute{\alpha}\pi' \epsilon\mu\alpha\nu\tau\omicron\upsilon$ にのみ向けられているととれる（このときは $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ はうへの定式の $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ と同質）ということである。イエスの $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ が躓きとなるのは敵対者にとってである以上に、「信じているつもりの者たち」にとってのことであるのである（そしてこの場合にこそ危険度は甚大なのである）。

関連拙論

佐々木寛治：『メタファー過程に寄せて』
——『十字架上のメタファー』

川崎医学会誌一般教養篇第20号 1994（＝過程）

川崎医学会誌一般教養篇第20号 1994（＝十字架上）

——『「わたしを見たから信じるのか」——ヨハネ「福音書」における交錯配列法の光の下での θεωρεῖν』

中国短期大学紀要第28号 1997年（＝セオーレイン）

——Zur Exegese über Joh. 8,52-53 (eine Resümee)

— unter dem Licht des Chiasmus und der Architektonik im Johannes-„ Evangelium ”

- Kawasaki Igakkai Shi Liberal Arts & Science Course No 23 1997 (=Joh. 8,52-53)
 ——『イエスのエイドーとマリアのエイドー——ヨハネ「福音書」11章28-37節の提示語分析』
 中国短期大学紀要第29号 1998 (=エイドー)
 ——『ヨハネ「福音書」9-10章の構成——ヨハネ「福音書」9-10章における術語 $\lambda\alpha\lambda\epsilon\iota\nu$ [I-1]——』
 川崎医学会誌一般教養篇第24号 1998 (=構成)
 ——『分割する言葉——ヨハネ「福音書」9-10章における術語 $\lambda\alpha\lambda\epsilon\iota\nu$ [I-2]——』
 川崎医学会誌一般教養篇第24号 1998 (=分割)
 ——『羊たちは彼の声を聞く——ヨハネ「福音書」9-10章における術語 $\lambda\alpha\lambda\epsilon\iota\nu$ [I-3]——』
 川崎医学会誌一般教養篇第24号 1998 (=聞く)
 ——『フォース カイ ポース 光を恵まれた者における言葉の生成
 —ヨハネ「福音書」9-10章における術語 $\lambda\alpha\lambda\epsilon\iota\nu$ [II]——』
 川崎医学会誌一般教養篇第24号 投稿希望論文発表会口頭発表・原稿提出断念 1998 (=フォース)
 ——『ある奇跡物語の転倒』——ヨハネ「福音書」9-10章における術語ラレイン [III-1]
 中国短期大学紀要第30号 1999 (=転倒)
 ——『テキスト重層性についてのレジュメ “Doubling”-Topic-Isotopie
 —新しいテキスト記号論=Semegesis に向けて——』
 日本新約聖書学会第39回大会口頭発表付属論文 (=重層)
 ——『ヨハネ「福音書」レトリック諸構造参考資料』
 日本新約聖書学会第39回大会口頭発表付属資料集 (=39資料)